

2018年『太平記』現代語訳

侍従帰りて、「かくこそ」と語りければ、武蔵守師直は

「このよう(な女房の反応でした)」と語ったところ、

いと心を空に成して、「たび重ならば情けに弱る
たいそう心がうわの空になって、
「何度も(求愛を)重ねたら情にほだされる

こともこそあれ、文をやりてみばや」とて、兼好と
こともあるだろう。
手紙を送ってみたい」
兼好法師と

言ひける能書の遁世者をよび寄せて、紅葉襲の薄様
言った
達筆な隠棲者を
呼び寄せて、
もみぢがさね うすやう

の、取る手も燻ゆるばかりに焦がれたるに、言葉を
取る手も香りが立ち上りそうなほどに
香が焚き染められた紙に、
言葉の限りを

尽くしてぞ聞こえける。返事遅しと待つところ、
尽くして(女房に師直の恋心を)申し上げた。(師直は)「返事が遅い」と(思って)待っているところに、

使ひ帰り来て、「御文をば手を取りながら、あけて
使いが帰って来て、
「(女房は師直様からの)お手紙を手取るけれども、
開けて

だに見たまはず、庭に捨てられたるを、人目につけ
見る(こと)さえならざす、
庭に捨てなされたので、
(私は)他人の目に見せない

じと、懐に入れ帰りまるつて候ひぬる」と語りけれ
ようにしようと(思って)、懐に入れて帰参しました」
と語ったので、

ば、師直大きに気を損じて、「いやいや物の用に
師直はたいそう機嫌が悪くなって、
「いやはや、
何の役にも

立たぬもの手書きなりけり。今日よりその兼好
立たない者は、
達筆な者であるなあ。
今日から
その兼好法師は、

法師、これへ寄すべからず」とぞ怒りける。
「ここに近寄らせてはならない」
と怒った。

きんよし

かかるところに薬師寺次郎左衛門公義、所用の事

このような(状況の)ところに、師直の家来て歌人の公義が、

用事があるて、

有りて、ふとさし出でたり。師直かたはらへ招いて、

不意に現れた。

師直は(公義を)側に呼び寄せて、

「ここに、文をやれども取つても見ず、けしからぬ程

」(ここに、

恋文を送つても、

取つて見ることもしない、

異常なほどに

けしき

に気色つれなき女房のありけるをば、いかがすべき」

態度が冷淡な女房が

いたのだが、

どうするのがよいか」

いはき

とうち笑ひければ、公義「人皆岩木ならねば、

と笑ったところ、

公義は

「人は皆岩木ではなく情があるので、

なび

いかなる女房も、慕ふに靡かぬ者や候ふべき。今一度

どんな女房も、

(自分を)恋慕う者になびかない者がございましょうか。いや、なびくはずです。もう一度、

御文を遣はされて御覧候へ」とて、師直に代はつて

手紙を

お送りになつてござんなさいませ」

と言つて、

師直に代わつて

文を書きけるが、なかなか言葉はなくて、

手紙を書いたが、

かえつて(和歌以外の)詞書はなくて、

返すさへ手や触れけんと思ふにぞ

(あなたが書いてくれた手紙ではなく)突き返した手紙でさえ、(恋しいあなたの)手が触れたのだろうかと思う

ウ

わが文ながらうちも置かれず

ので、自分の手紙だけれども、(適当に)ちよつと置くこともできない(ほどあなたが愛しい)

押し返して、仲立ちこの文を持ちて行ききたるに、

繰り返して、

仲立ちの侍従がこの手紙を

持つて行ったところ、

女房いかが思ひけん、歌を見て顔うちあかめ、袖に

女房はどのように思ったのだろうか、

歌を見て顔を少し赤らめて、

(手紙を)袖に

エ

入れて立ち去るを、仲立ちさてはたよりあしからず

入れて立ち去ろうとしたので、

仲立ちの侍従は「さては、

この機会は悪くない」

と、袖をひかへて、「さて御返事はいかに」と申しければ、
と(思つて)、(女房の)袖を引き留めて、「それでは、お返事はどのように」と申し上げると、

さよごろも

ば、「重きが上の小夜衣」とばかり言ひ捨てて、内へ
「重きが上の小夜衣」
とだけ言い捨てて、
人目を

紛れ入りぬ。暫くあれば、使ひ急ぎ歸つて、「かく
忍んで奥へ入った。しばらく経つと、
使ひは急いで(師直の所に)歸つて、「このよう(な

こそ候ひつれ」と語るに、師直うれしげにうち案じ
反応)でございまして」と語るど、
師直は
うれしそうな様子で少し考えて、

て、やがて薬師寺をよび寄せ、「この女房の返事に、
すぐに公義を
呼び寄せて、
「この女房の返事として、

『重きが上の小夜衣』と言ひ捨てて立たれけると
『重きが上の小夜衣』
と言ひ捨てて
立ち去りなされた

仲立ちの申すは、衣・小袖をととのへて送れとにや。
仲立ちが申すのは、
衣・小袖を調達して
送れという意味であろうか。

その事ならば、いかなる装束なりとも仕立てんずる
そついう事であれば、
どんな装束であつても
仕立てようとするのに、

に、いと安かるべし。これは何と言ふ心ぞ」と問はれ
(私なら)とても簡単に違いない。
これはどついう意味だ
と問いなされた

ければ、公義「いやこれはさやうの心にては候はず、
ところ、
公義は
「いや、これ(「重きが上の小夜衣」)はそのような意味ではございませぬ。

新古今の十戒の歌に、
新古今和歌集にある十戒の(II)について詠んだ)歌に、

さなきだに重きが上の小夜衣
そつでなくてさえ、
重い小夜衣の上に、

わがつまならぬつまな重ねそ
自分の妻ではない人妻と褌を重ねる共寝を行つてはいけない

と言ふ歌の心を以つて、人目ばかりを憚り候ふもの
キ
はばか
という
歌の意味を用いて、
ひと目を気にしているだけですよ

ぞとこそ覚えて候へ」と歌の心を釈しければ、師直
と(いう趣旨だと)思われます」
師直は

よろこ
と歌の意味を解釈したので、
大きに悦んで、「ああ御辺は弓箭の道のみならず、
よこへん ゆみや
大変喜んで、
「ああ、
貴殿は弓道だけでなく、

歌道にさへ無双の達人なりけり。いで引出物せん」
並ぶ者がいない達人だなあ。
さあ、(褒美の)贈り物を与えよう」

とて、金作りの丸鞘の太刀一振り、手づから取り
こがねづく まるざや た ち
と言って、
金細工の丸鞘の太刀一振りを、
(師直が)自分の手で取り

出だして薬師寺にこそ引かれけれ。兼好が不祥、
出して
公義に与えなされた。
兼好法師の不運と、

公義が高運、栄枯一時に地をかへたり。
公義の幸運は、
栄枯盛衰が一瞬で入れ替わった。